

## 20世紀転換期英国における人口と教育

上野 耕三郎

### ボーア戦争と『身体の退歩についての部局間委員会』

南アフリカの植民地化を画策するイギリスは、金やダイヤモンドなどの地下資源をめぐる、17世紀ごろ入植し定着したオランダ系の白人あるいは混血のアフリカーナー（イギリス人はボーア人と蔑称した）との間で、二次にわたって戦争を起こした。当初の楽観的なムードとは裏腹に、イギリスは苦戦を強いられ、多数の犠牲者を出し、戦争は1902年まで続くことになった。志願兵が募られたが、多くの者がその兵役検査で不適格の烙印を押され、一部の階層では身体的退歩（deterioration）が見られる、とさまざまな場面で憂慮されるようになった。ヴィクトリア時代の栄華を誇った帝国も活力が減衰し、その前途には暗雲が立ちこめ、このままでは政治上でも産業上でも他国の後塵を拝するようになるのではないかという不安を多くの人の心にかき立てたのである。

この「退歩」がいったいどの程度国民の間に広まりを見せているのかを探るために、人口（population）内のある階層に見られる退歩に関する論議について予備的調査をすることを目的として、1903年には『身体の退歩についての部局間委員会』が組織された。<sup>(1)</sup> というのも、陸軍を志願してきた者たちのうち、その身体的要因を理由に志願が認められなかった割合がたいへん多いこと、<sup>(2)</sup> そしてスコットランドの体育に関する王命委員会報告書などの他の証拠でも退歩がすすんでいることが示されているからである<sup>(3)</sup>。委員会の目的は三点にわたっており、一つめの目的は、医療専門家の忠告の助けを借りて、人々の健康と身体を正確に比較評価するために、データを定期的に政府

と国民全般に提供すべきステップを示すこと。二つめは、ある種の階層に存在する身体的退歩の原因を明らかにすること。三つめはもっとも効率的に退歩を減少させる手段がどのようなものであるかを指摘することであった。<sup>(4)</sup>

委員会は、イングランド、スコットランド、アイルランドから68人の証人(男性54人と女性14人)を喚問し、26日間にわたってその証言を聴き、翌1904年に報告書を提出している。作成された報告書は3部に分かれており、パート1は軍関係者の証言の検討、ならびに国民の体格(national physique)の問題を明らかにするために信頼できるデータを得るのに必要なステップについて、パート2は退化(degeneracy)の要因とそれを把握するための手段について、パート3は主要な勧告の要約から構成されている。巻末には附録としてさまざまなデータや図表がつけられている。<sup>(5)</sup>

ただし、「退歩」をめぐる議論に決着がついたかどうかはきわめて曖昧であった。委員会は人口の健康や体格を比較するために必要となる統計や図表になった正確な情報を得られてはおらず、王立内科外科カレッジからの回答では、退歩について明確な結論は得られない、ということであった。<sup>(6)</sup> 委員会は報告書の最後で、こう結論づけている。

「人々のあいだで退歩が進行している、と不十分な基礎の上に決めつけている人々がいるが、集めた事実や意見がそのような理解を和らげるのになんらかの効果があればと考えている。とにかくも、そのような不確かで複雑な問題を決着させるためには証拠が重要である、と理解する人々に対して、委員会は考えるための素材(matter)を与えることに最終的には行き着くと信じている。……これらの人々はよく調べられた正確な情報を得るために必要な措置がとられることを待っているであろう。それなしでは一般的問題に関しては価値ある結論が得られない。」<sup>(7)</sup>

判断を下すにはあまりに「憶測、臆見、感想」<sup>(8)</sup>が乱れ飛んでおり、証人の証言やデータは多くの人々を納得させ、行動へと動かすだけの「事実」の力

とはなり得ていなかったであろう。議論の決着を見るためには、データや証拠を収集し、それを提示することが第一義的な重要性をもっていることは万人一致の結論であった。<sup>(9)</sup>

それゆえに、委員会による主要な勧告の第一番目に挙げられているのは、人口の人体測定学調査の必要性である。「必要な観察の量と方法については意見を異にしたが、人体測定記録が唯一の信頼できる利用可能なテストであり、十分な量が集められれば、身体の退歩の目安、あるいはその逆に進歩 (supreme) の目安となる、とのことをすべての者が認めた。」<sup>(10)</sup>「人口の身体の状態に関する明確なデータを集めるとの観点で、報告書の第一部で記された線に沿って、できる限り早く恒常的な人体測定学的調査が組織されるべきである、と委員会は考えている。まず第一に、この調査は学校や工場の児童や年少者の定期的測定をその目的としており、そのために学校教師や工場医の手助けを必要とし、少数の専門的な調査者によって補助される。この他にも、長期にわたる、国の人口の総合的そして特別な調査がなされる。」<sup>(11)</sup>

さらには病気の届出制度を組織し、救貧法医務官 (Medical Officers) や国中の病院やそのほかの慈善機関を利用できるようにすれば、データの集積は可能となるであろうとしている。<sup>(12)</sup>

少し先回りしすぎかもしれないが、私たちはここで人口が、調査を介して、ことば、数値というきわめて日常的な技術によって書き記されたものへと転換され、構成されてゆくことをまずは確認しておけばよいであろう。

## ゴルトンの人体測定学や児童協会

実は人体測定学はそれ以前に始められており、ゴルトンは個人と家族の特質を測定することで、個人が社会でよりふさわしい役割を演じることができると考え、1880年代のはじめに人間の遺伝問題に直接関係する人体測定データを集め始めていた。男子パブリック・スクールをデータ収集の場とし、『ネイチャー』誌への手紙で、「男性教師が少年のさまざまな経験を科学的な方法

でコード化し、さまざまな道徳的そして知的能力を比較し、その自然の気質を区分けし、……それらを詳述することができるならば、どのような素晴らしい心理学的の仕事が達成できるであろうか」<sup>(13)</sup>と、人体測定学がもたらす心理学的の仕事について自説を展開していた。1884年にはサウスケンジントンで開催された国際健康博覧会の一部として自費で人体測定実験室を開設し、翌1885年までに入場料を払った9,000人以上の人々の体重、座高、身長、腕の長さ、視力、聴覚、肺気量などの測定がなされた。博覧会が閉幕を迎えた1888年には、実験室は博物館のより恒久的な場所に移され、データの収集は1894年まで続けられた。<sup>(14)</sup>

1896年に創設された「児童協会」(the Childhood Society)<sup>(15)</sup>もまた、イギリスの人口の「退歩」への憂慮に駆りたてられていたが、それには前史がある。慈善組織協会は、いったいどの程度の子どもたちが身体的、精神的そして道徳的に欠陥を持っているのかを調査するために、何校かの学校を選び、調査を実施する委員会を組織した。それを取り仕切ったのがワーナー(Francis Warner)であった。第7回衛生およびデモグラフィー国際会議が1891年にロンドンで開催され、報告書が提出され、その内容は参加者に大きな反響を巻き起こした。会議は子どもの精神のおよび身体的状態について調査をするための委員会を組織することを決定し、イギリスの代表者としてワーナーが調査の仕事を取り仕切ることになった。ワーナーのアプローチは心理学的というよりは生理学的であり、観察すべき事実は身体的なものであるべきで、身体的なものの観察が精神的な状態に対応する頭の活動の様式についての情報を提供する、と主張していた。義務教育の導入以後、精神的・身体的欠陥を持ち、十分に満足のいく教育を受けていない子どもの存在が次第に明らかになり、国家の重荷になっている、という憂慮が調査の背後には働いていたのである。1888-91年そして1892-94年にそれぞれ5万人の子どもを調査し、その結果を『子どもの精神的ならびに身体的状態の科学的研究報告書』(*Report on the Scientific Study of the Mental and Physical Condition of Childhood*)のなかで記録しているが、彼の主要な関心は障害者(the defec-

tives) にあった。子どもの科学的調査研究に基づいて、子どもを保護育成すること、人口の質を高めることが、人口の「退歩」を解決するための一里塚となった。<sup>(16)</sup>

### 義務教育が子どもへの関心を惹起した。

子どもたちへの公的な関心を巻き起こした場のひとつには学校があった。「出来高払い制度」(payment by result)の導入によって、子どもたちには3R'sの試験が課されるようになり、さらには義務教育が導入されるに及んで、教師は実際にたくさん子どもたちを教えることになり、また視学官は査察をし子どもたちに試験を課すことになったが、そうすると子どもたちの間に能力の開きがあることが明らかになった。なかには学ぶことができない子どもがいることもわかってきた。R. H. トーニーによれば、「個々の子どもは生来の能力に違いはない」とのロマンティックな幻想が崩れ落ち、教師もまた「それぞれの子どもはさまざまなニーズをもっている」と認識せざるを得なかった<sup>(17)</sup>。子どもたちの身体的・能力的差異が教師をはじめ管理者や視学官などの目に触れ、一目瞭然となったのである。それぞれの子どもたちをふさわしい場や方法で教育するためには、その差異が明らかになっていなければならない。こうして学校でも子どもについての調査が強く求められるようになっていった。「強制的な軍役がない国では、学校生活の時期は、国家が全人口の肉体を鑑定し、健康的な発達にもっともふさわしい状態を確保するための、唯一の機会を提供する」<sup>(18)</sup>ものとなったのである。こうして学校は子ども人口を調査する最適な場となり、児童生徒の肉体的・生理的状态についての調査そして統計の重要性が繰り返し主張されている。<sup>(19)</sup>教育局の長をも務めた保守党の政治家ゴースト(John Eldon Gorst)はプロイセンにおける児童の医学的検査と比較しながら、自国では教育の「素材」である子どもたちが満足に医学的検査されておらず、その結果、思うように教育の成果が上げられていないことを嘆き、医学的検査を学校へと導入することを強く提唱してい

る。

「国家の子どもたちが公立学校に集められた際に、当局に提案されるま  
ず最初のことは、子どもたちを評価することであり、子どもたちがどの  
ような状態にあるかを確認することである。教育機構が働きかけるべき  
ものは素材である。すなわち、その質を確かめ、従わせる動きにそれが  
ふさわしいかどうかを確かめる、というビジネスライクのものである。  
有能な医学当局による検査手段によって児童の状態を確かめる簡単で明  
白な方法は何年にもわたって王命委員会によって、公的な委員会、科学  
的の団体、公的な会議によって勧告されてきた。多くの自治体では自発的  
にとりあげられたが、教育局によっては未だ処置されていない。プロイ  
センでは、政府が賢明にもその成長する子どもたちを保護管理し、あら  
ゆる少年少女が学校に入ってきた際に、軍隊への志願のように医学的な  
検査をしている。身長、体重やその他の特徴が記録され、病気あるいは  
奇形 (malformation) が調査され、処置される。配慮が必要な子ども  
たちは毎月訪れる医者に診せられる。学校生活の各年にはすべての子ども  
たちの検査が繰り返される。それぞれの子どもの状態と進歩が、学校に  
入ったときから離れるまで記録される。同様の措置は多くの文化的国家  
ではなされている。私たちの国ではこのような普遍的で制度的なものは  
まったくない。いくつかの自治体で実施され始めている医学検査は場所  
ごとに大きく違い、正確な情報の基礎とはならない。もちろん、いかに  
システムティックではないにしても、子どもたち自身の健康にとっては  
もっとも価値あるものである。私たちの子どもたちの肉体的状態につい  
て、いったいどれくらいの子どものが飢えており、どれくらいが精神薄弱  
(feeble-minded) で、どれくらいが奇形で、どれくらいが盲目で、どれく  
らいが耳が聞こえないかについて議論が盛んになされている。それらは  
適切な医学検査でわかるはずである。」<sup>(20)</sup>

## 校長や教師

義務就学が実施されることで、子どもたちが一緒に集められるようになった学校は子どもたちの「身体」のもっとも手近な観察の場であり、その場で子どもたちと接している教師には、観察の担い手としての役割が課されるようになった。1898年以來勅任視学官を務めている医師のアイクホルツは、その役割にふさわしいのは日々子どもたちに接している校長や教師である、と証言している。

「家庭を訪問し、親を調査するのは視学官にとって不可能だし、職務外である。学校管理者 (managers) は家庭を訪問できるし、すべきであるが、いない場合には、子どもと親に接触している教師が情報に関して次の防御ラインとなる。校長は、正しく、最も厳しい検査にも耐えられるほど多くの情報を手にすることは驚くにあたらない。そのような調査を学校管理者へと委ねることはひとつの単純な理由から不可能である。そのような仕事をすることのできる管理者は十分な人数だけはいない。このような有益な仕事をする人たちはいるが、その仕事の幅の広さから十分にせせない。家庭環境の調査には、校長にたよらざるを得ない。」<sup>(21)</sup>

「学校での子どものシステム化された身体検査があらゆる学校当局に対して公的な義務として課せられるべきである。……さまざまな衛生分野の訓練を受けた教師の手助けがあれば、そのシステムが彼らの観察と記録におおいにもとづかすことができれば、大がかりで費用のかかる医療スタッフをまったく必要としないであろう。」<sup>(22)</sup> 彼らが子どもの「身体」を観察し、記録をつけていけば、そこから人口の標準と比較して、各々の子どもの「身体」が構成されてゆくのは必然であろう。

義務教育によって子どもたちの身体や精神はかつてとは異なった方法で研究と関心の対象となった。1870年代以降、特別な場を組織しなくとも、就学

を強制された子どもたちは学校へと通い始めており、少数の者だけではなく、すべての子どもたちがある年齢に達すると一箇所に集められた。こうして教師を初めとする人々は毎日子どもたちと顔を合わせるようになり、他の子どもたちと明らかに違っている特徴をもつ子どもたちは容易に目につくようになった。学校は個人の身体、内面を調査し、測定し、ことばであれ数値であれ、書き記し、比較可能な形態へと変換することで、子どもたちを個人化・主体化する場へとなっていった。さらには今までなかなか踏み込むことのできなかった都市の生活やそこで暮らす労働者階級家族のこまごまとしたことがら、子どもを通して監視の目にさらされるようになった。19世紀の前半にも子ども人口を調査し測定する試みがなされたが、たとえば1839年の救貧法委員会報告書も1851年の国勢調査もきわめて限定されたものであり、炭坑や工場で働く子ども、農業ギャング、煙突掃除の子どもたちはきわめて限定された特殊な犠牲者たちとしてであった。これに較べ、19世紀の終わりにかけて社会は総体としての子ども人口に対して、「退歩」への憂慮から強い関心を抱き始め、それをターゲットとして調査を怠らしたのである。

## 督学官

世紀の終わりにかけて、チャールズ・ブース（Charles Booth）の『ロンドンの民衆の生活と労働』<sup>(23)</sup>に結実する調査や、1899年に始まるラウンタリーの貧困調査などが試みられ、<sup>(24)</sup>20世紀の10年代までに人口を調査し測定するための十分なテクニックが発展したとされている。<sup>(25)</sup>

ブースの調査『ロンドンの民衆の生活と労働』は1891年に第一版が出ているが、第一シリーズの全セクションには「学校生活（School Life）」という項目があり、学校での子どもの調査がその調査の基盤を形成していた。ブースはロンドンの貧困の階層分けをするのに、督学官からの情報を用いていた。彼自身が言うように、「ロンドンの街路とさまざまな地区を描くのに際して、多くの情報源に頼ったが、人々を区別するのに、学校委員会の督学官が私



たちに初等学校の子どもたちの家庭や親について話したことに、その多くを依拠していることに留意すべきである。」<sup>(26)</sup>「彼らは毎日人々と接しており、とくに極貧の児童の親、彼らの暮らし向きに関してかなりな知識を持っている。[イーストロンドンの]街路から街路へと、家を一軒一軒訪ね、一家族一家族訪ね、督学官によって生々しく詳細に語られたように、その住民を描くことはいまだだれも成功していない。……それらをひとまとまりとして捉えようと、その能力と良識を高く称えても称えすぎることはない。……その助けがなければ、何もなされなかつただろう。」<sup>(27)</sup>

食事を満足に摂っていない子どもたちに食事を提供する際にも、子どもたちの家庭を事前に調査することになっていた。東ランベス教師給食協会の事務長であり、委員会学校の校長リビ(Libby)は貧困児童に給食を無料で提供する事業に関わっていたが、「部局間委員会」において、貧困家庭の敵対心を引き起こすことなく、その情報や知識を引き出すのに、督学官が大いに役立ったことをこう証言している。督学官は家庭外で働いている少年少女を学校へと通わせるというその義務を果たすのに、家々を訪ね歩いており、子どもたちの家庭生活と直に接しており、父親が失業した時期を知っているし、年長の少年少女が学校を離れ、働きに出て、家族が困窮にあえいでいることも知っている。したがって、督学官が家庭を訪ねても、訪ねられた人はその訪問が慈善から発したものであるとの考えを思いつかない。一年中家々を訪問し、家だけではなく、地域も訪ね歩いているので、様々な地区で見られる貧困状態についての一般的な知識や価値ある情報を与えてくれるので、委員会の構成員に督学官を加えることになった。食事を無料で提供するかどうかの判断をする際には、彼らの意見を訊くことを常としていた。<sup>(28)</sup> 督学官や教育当局は情報の宝庫であり、<sup>(29)</sup> 家族というきわめて私的な領域へも調査監視の触手を伸ばしてもいたのである。

督学官に課せられていた最重要な義務は、彼らが担当する地域と学齢期の子どもがいる労働者階級の家族環境について詳細な知識を集め、必要とあれば、出席を促すような措置をとることであり、公的調査において督学官は欠

くことのできない役割を果たしていた。1884～5年の「王命住居委員会」の110人の証言者のうち、16人はロンドンの督学官あり、時の通商大臣ジョセフ・チェンバレン（Joseph Chamberlain）は委員会に対して、バーミンガムの督学官はその公的な義務の一部として、無償で地域の過密さについての調査を行ったと証言していた。新しいロンドン州会の労働者階級の家屋委員会が最初にとったアクションは「不衛生なエリア」の場所についての情報を得るのに督学官の補助が必要だと学校委員会に要求したことであった。バーミンガムの家屋の状態を調べるために督学官が利用された、というチェンバレンの指摘は、「チャールズ・ブースに1886年から始まるロンドンの記念碑的調査にロンドンの督学官を用いるという考えを与えた」とルービンスタインは評価しているし、<sup>(30)</sup>「ブースの調査は近代イギリスの模範となる社会調査である。督学官の情報が調査でキーとなる役割を演じたが、それはいわゆる「イングランドの状態についての問題の再発見」の明確で重要な要素として、学校児童の状態への関心を喚起するのに役立つものである」<sup>(31)</sup>とされている。

## 医療的監視

学校もさることながら、子どもたちの医療的監視もこの時期に進行していた。子どもの健康については学校を中心とした健康管理のための機構——保健医務官（the Medical Officer of Health）、学校医務官（School Medical Officer）、健康訪問官（Health Visitors）、学校看護婦（School Nurses）など——が組織され、子どもたちの健康を調査し、刻記し、統計化することで、子どもたちの身体を構成する試みが続けられてきた。

オールデンによれば、この期には中央教育当局によって健康診断が義務となり、次のような方式でそれがなされるべき、と専門家間では一致を見ている。第一に「検査の方法はその結果が比較でき、正確な推論が導き出されるように、一様でなければならない。」ホワイトホールにある中央医療局の機関

が、地方教育当局の医療業務を指導し、コーディネートし、これは保証されている。」第二に「それぞれの子どもの入学に際して、教育を受けるにふさわしい肉体的そして精神的な能力があるかどうか、そして(a)通常の初等学校に、(b)マンハイムの「ヒルフスークラス」のような改造された初等学校に、あるいは(c)特殊学校に入学すべきかについて、予備検査がなされるべきである。」第三に「検査は決められた、子どもの漸進的発達にしたがい、授業の結果で苦勞していることがないかを見つけるために、長すぎた間隔をおかないで、決められた時期に繰り返されるべきである。……この制度によってそれぞれの子どもは初等学校への入学時に検査され、健康カードが渡され、それには健康診断のすべての詳細が記入される。そこには「よい、普通、悪い」と記入される。各子どもは6カ月ごとに教師によって体重測定、身長測定がなされる。健康状態が「よい」とされた少年少女は学校生活の第3、第5そして最終学年で医師による再診を受ける。健康状態が「悪い」とされた子どもは教師の監督下におかれ、2週間ごとに医師の診察を受ける。これに加えて医師は各クラスの一般的検査を年に4度行い、標準以下とみえる生徒を診察する。」第四に「子どもの在学中は、すべての場合に医師の検査結果は参照に供するために学校に保存されるべきである。この記録は次のような検査結果を含むべきである。(a)身長、(b)体重、(c)一般的栄養状態、(d)胸囲、(e)心臓や肺の状態、(f)たとえば視覚や聴覚などの感覚、(h)歯の状態、(i)皮膚の状態、(j)骨と関節の状態、(k)精神的状態。」第五に「子どもの環境は、身体の状態と同様に、考慮すべき大変重要な点であるので、健康診断は校内の注意深い監督を含むべきである。」<sup>(92)</sup> (傍点強調は本文イタリック、傍円強調は引用者。以下同様)

子どもの身体や精神的能力がある一定の方式のもとで検査され、「科学的」に分類されることで、子どもたちにふさわしい教育内容や学校が提供することができるというわけである。

## 観察・記録カード

調査は子どもやその家族を訪ねるだけで事足りたわけではなかった。見聞きしたことを書き記すことによって始めて、その情報や知識は現実を構成しリアルなものにさせることができたのである。カーはブラッドフォード学校委員会で9年間、ロンドン学校委員会では2年間にわたり医務官を務めていたが、ロンドンの学校出席者76万人あまりのうち、5万人の子どものを対象として調査をすれば、その調査は十分な信頼性をもつと考え、計画を学校委員会に提案をし、個々の子どもの身体、教育、社会階層などについての調査記録を5段階に点数化してカード化することを勧めている。

「このカードによる調査はいかになされるべきか説明して欲しい。——ロンドンでは、5万人の子どもから得られた記録は、すべての子どもを対象とした国勢調査と同様に、それも1/12の費用で有益な結果をもたらす。最近述べたように、そのような調査はなされるべきだが、現在の状況では先送りするのが適切であろう。委員会学校の生徒たちのみに代えて、すべての初等学校の子どもたちを対象とすれば、もっと価値あるものとなるであろう。この仕事をなすにあたって提案された方式は、それぞれの生徒についての事実をカードに記録することである。それぞれのカードの記録は子どもの(a)教育の状態、(b)身体の状態、(c)社会的地位を知る手段を提供する。さまざまな要因がどのような関係にあるのかが回答から引き出せたであろう。調査したさまざまなポイントを評価する大きな困難は、ある特質に対して1から5までの点数システムを用いることで克服される。平均の3はノーマルであり、2はそれより低い、4はノーマルよりもよい。5は最もすぐれた状態である。1は可能ならば即座に改善されるべき悪い状態を表している。子どもの教育状態を知るためのデータは教師によって与えられる。教師は子どもの名前と住所をカードに書き入れ、何もことばを使わずに、アラビア数字で、それに続

くものに対する答えをマークする。—少女のカードは白で、少年のカードは青である。」<sup>(33)</sup>

カーはサルフォード学校委員会のカードも紹介しているが、記入すべき項目として以下のようなものが挙げられている。子どもの名前／子どもの住所／年齢／誕生日／学校での（生徒の学力）水準（standard）／（子どもの担当教師によって評価される）精神状態／（登録簿に記載されている）目で見た鋭敏さ／（教師の評価による）聴力／社会地位は学校出席部局によって得られる／父親は家に住んでいるか／母親は家に住んでいるか／親は外国生まれか／母親は外で働いているか／家族と一緒に住んでいる人は他に何人いるか／部屋は何部屋か／肉体的状態については健診員が、衣服の状態／靴を履かない状態での身長、靴を履かない状態での体重、さらには(a)髪、(b)頸部リンパ腺、(c)歯、(d)喉と鼻、(e)耳、(f)一般的な栄養状態、(g)種痘痕を記録することになっている。<sup>(34)</sup>

ゴルトンもまた原初的な形態の学校記録カードをデザインしていた。それに記入されるものは生徒の身体的、精神的そして道徳的特徴であり、子どものあらゆる生活を診断し、一瞥すればわかるように単純な図表にその結果を示すことをめざしていた。カムデン女子ハイスクールの女性教師ブライアントは子どもガイダンスの計画への前提的なものとして「フランシス・ゴルトンの勧めで、子どもの精神的特徴をテストする手段を案出しようとしていた。」<sup>(35)</sup> すべてのロンドン州保護収容所においては、カードシステムが採用されており、2,246名の記録が集積されており、精神異常者（insane）の患者の家系の記録を集めており、遺伝と精神異常とを関連づける統計的データが形成されることになった。<sup>(36)</sup>

子どものさまざまな属性に関する情報や知識がカードに記入され、ファイルとして保存累積、分析、評価されることで、世界は分節化され、カオスから抜けだし、初めてリアルなものとなる。このような一見とるに足らない、そして私たちが日ごろ慣れ親しんでいるデバイスが現実を構成し、科学的と

称される知識やカテゴリーを生みだすもともになったことは見落とされがちである。数量化は科学へと続くものであり、子ども人口のなかで個々の子どもの個人化、主体化がはかられ、その先には統治の途が拓かれてゆくのを容易に見ることができよう。

## 写真

人々を個人化し、構成する技術はなにも印刷されたことばや数字に限られてはいなかった。この期に普及をみるようになってきた写真もそのために用いられるようになった。

オールダムの衛生医務官を8年間にわたり務め、1894年以来マンチェスターの医務官を務めていたニヴェンの証言するところによれば、マンチェスターの初等学校の校長であるワイアトは、20年前と最近学校で撮られた、下層階層の児童の写真を所有しているが、これらの写真を比較すると衣服と肉体に顕著な改善が見られる、と彼から聞かされていた。ニヴェンはまた、15年前と昨年に、公衆衛生局の主任が撮ったマンチェスターのスラム、それも最悪の場所の写真を示し、偶然にも多くの子どもたちが写真家の周りに群れ集まっているが、これらの写真から判断する限り、改善がみられると証言している。<sup>(37)</sup>

アイクホルツもまた写真は過去から現在への進み方を示し、子どもたちが改善されている証左となるものであったとし、委員会に写真を提示し、こう言っている。「数校に在籍している数人の年長の子ども写真が幾枚かあります。これはサザックのラントレーンにある、聖ジョージ教会の反対側にある学校でのものです。一連の写真はひとつは25年前、もうひとつは23年前、三番目は最近撮られた同年齢の子ども写真です。すべて同じ学校で撮られたものです。」「彼らはいっそう教育を受けた容貌をしている」ことから肉体的退歩についての証言を行っている。「第二世代の子どもたち(教師はその世代の父親たちを教えた)はたいへん行儀が良く、より知的で、ござっぱりと

した服装をし、よい体つきをしている。ほとんどの子どもが粗野な顔つきをしていない。(何枚かの写真を見せながら)1878年の写真がここにある。そのような野蛮なタイプは消え去っており、たいへん洗練されている。」<sup>(38)</sup> リヴァプールで25年間にわたって工場医を務め、認定工場医協会の会長を務めているヤングは、食事が子どもに満足に与えられている場合とそうでない場合の影響とを、医者が撮った写真を見せながら物語らせている。<sup>(39)</sup>

ターグによれば、1860年代ストックポートのぼろ服・授産学校(the Stockport Ragged and Industrial School)は地元の写真家に依頼して、教師と生徒のそれぞれの写真アルバムを作成しており、同様の記録はグリニッチ病院附属学校でも作成されていた。1870年代に入ると、写真による証拠記録化はいっそうの普及を見るようになり、1874年にはバーナード(John Barnardo)はステップニー・コズウェーに創設した「貧困少年のためのホーム」(後の「バーナード医師のホーム」の基礎となる)に最初の写真部門を開設した。1874年から1905年までにおもに施設の入退所に際しての子どもの記録として55,000枚もの写真が撮られた。参照に供するために履歴アルバムが作成され、個人史の用紙の上に貼られ、子どもの生い立ちの詳細、肌の色、年齢、身長、報告書、子どもの進歩を記録した写真などがファイルされていた。ターグは「19世紀後半に証拠と写真は結びついたが、それは新しい機関ならびに観察と記録保存の新しい実践の出現と結びついている。すなわち、表現や規制の新たなテクニックは、当時の産業化された社会における地方や中央の政府を再構築するのに、そして規律機関—警察、刑務所、保護収容所、病院、公衆衛生部門、学校、そして近代的工場制度自体—のネットワークの発展の中心にあった。……新しい規制的そして規律的機関は、19世紀を通して、新しい社会的ならびに人類学的科学—犯罪学はもちろんのこと、精神医学、比較解剖学、細菌理論、衛生等々—の形成に緊密に結びついていた」<sup>(40)</sup>と述べ、写真という権力テクノロジーが、以前には認知されていなかった方法で統治されるべき人物や社会についての新たな知識を生みだし、新しく形づくられた知識によって統治へと道が切りひらかれていくとして、写真における権

力／知の関係を主張している。

### 人体測定学のための中央組織

収集された情報や知識はどのような場を集積され、どのように使用されることが意図されていたのだろうか。エディンバラ大学の解剖学のカニングム (D. J. Cunningham) 教授とグレイ (J. Gray) 氏は情報局 (a Bureau of Information) を組織する計画を練っていた。その計画によれば、本部はロンドンに置かれ、長官と副長官が任命されることになっていた。「そのうちのひとは人体の解剖と発達に熟知しており、人体測定学の仕事に携わったことがある人体測定学者であり、もうひとは近代的科学方法の訓練を積んだ統計学者であるべきである。統計部門は局のなかに組織されるべきである。この部門でなされる仕事は次のようなものである。1. 標準的道具を保有し、調査に必要な道具を支給する。2. 観察記録カードを測定などに従事する人へ配布する。3. 調査者が正確な結果を得ているかどうかを確かめるために、さまざまな学校やその他の機関を間隔をおいて不意に訪問する。4. 記入されたカードを回収し、分類し、必要な統計表をつくり、年次報告書を発行する。5. ロンドンにセンターをつくり、さまざまな階層の人が測定される。そこではまた、調査者あるいは測定者には観察メソッドや正確な結果を得るために必要な解剖の詳細が教えられる。6. 人体測定のごとについての情報を広め、国民の体格を保持する重要性に関して大衆の関心を喚起する。」<sup>(41)</sup>

人口に関する様々なデータを集め、それを分析し政策を提言するためには、中央においてデータ集積の部局を組織することが必要である、として委員会はいこう提言している。

「委員会は国家部局である諮問機関 (Advisory Council) の創設を勧告することを強調する。人々の肉体的福祉 (well-being) に関連する問題を扱い、医学団体などによって任命されたメンバーを加え、人体測定学的調査や疾病記録 (Register of Sickness) から引き出される情報を受け取り適用するばかり



ではなく、国家関与がふさわしい公的健康に関連するすべての法的そして行政的な点について政府にアドバイスすることをもその義務とする。……そのような機関 (Council) はとくに地方政府委員会に大変な手助けとなり、知識と刺激を与えることになるであろう。委員会の行政のなかの公衆衛生の側面は他の多数の機能によって霞んでしまっただが、それに明確な位置を与え、人々の関心をその仕事に引きつけ、今まで欠けていた援助を与えるために必要なものである。」<sup>(42)</sup>

王命委員会のような暫定的な機関ではなく、恒常的な機関を創設することが強く主張されており、そのような機関は「専門家の指導の下、関連の国家部門と協同して、事実を収集し、分類する義務を負っており、そのことが事態解明の光明を投ずることになり、問題に関心を持つ人々がなんとかして国の進歩について納得できる手段を提供する。」<sup>(43)</sup> こうして、データの分析をすることで、地域ごとの比較が可能となり、差異が明瞭になり、「地方行政を監督し、遅れた地区を最もよく管理された地区の到達水準にまで引き上げようと努力するのが、中央当局の義務である」<sup>(44)</sup>と主張されている。

情報局の統計情報部門は人体測定学者、統計学者によって統括され、調査を主導し、得られた情報カードを回収し、分類をし、統計表や年次報告書を作成する役割を担うことになっていた。人やものごとを統治するための第一歩は統治すべき領域がいったいどのようなものであるかをまずは知らなければならぬし、ことばであれ数値であれ書き記すことが求められていた。書き記すことで世界は分節化され、人々に理解可能な形にすることで安定する。「退歩」をめぐってこの時代に再び統治の対象になったものこそ人口であった。人口をめぐる統計情報を集積、分析することで、人口はリアリティをもち、統治の対象となっていく。国家関与が望ましいと考えられた立法ならびに行政に「事実」に基づいた裏付けそして正当性を与えることができたからである。統計情報機関は統治のための情報を提供する役割を担うものとされていたのである。<sup>(45)</sup>

「部局間委員会」でも証人たちは人口の調査が必要であることを繰り返し主

張している。そのいくつかを挙げておく。

「私は、実際の状態がどのようなものであるか、ということについて世論が教育されることを切に望んできました。救うべき国民がここにおり、すべてのことのなかでそれが一番重要です。私が望んでいることは、何らかの中央方式が導入され、その方式によってひとつの場所で得られた知識や経験が他の場所、そしてすべての連合王国に持ち込まれ、助けとなることです。」「子どもの体格について実際に接している地域の関係者すべてに警告が発せられているが、国民にその状況を認識させるようなことはどのようなことでも価値があります。」「最初にすべきことは事実を手に入れることであり、私がおはつきりとは知らないことがらについて証言することに躊躇している理由がそれであります。」「人々が事実と向かい合いたいとこれほど望んでいる時代はかつてありませんでした。」<sup>(46)</sup>

「これらの疑問全体は議論に開かれている。これらの疑問を解決するためにはたいへん長期にわたる調査が必要であろうし、この調査の最後にはひとつの明らかな答え以上のことを得ることでしょう。……私たちが実際に今関心を持っているのは、体格の貧弱な下層の人々の存在です。私たちはたいへん多くの下層の人々に対処しなくてはなりません。どのようにしてそうなり、それを避けるにはいかにしたらよいのかということです。」「私たちの問題のひとつは商業競争、特にドイツとの競争であるので、委員会は、ドイツの新兵が人口のすべての階層から募られたとして、その平均がどのようなものであるかを見つけることである、と提言します。実際の病気がなければ、どのような例外もなく徴兵されます。考慮されるべき民族的要素はありましようが、その平均が基準となり、私たちの人口はそれと比較されましよう。私たちの人口をドイツの人口と比較できるある種の基準値を与えることになるでしょう。」「ドイツの統計を入手し、私たちの人口の一般的水準がそれよりも低ければ、ある

いは私たちの人口の大部分がたいへん低くて、ドイツの同じような層と比較できないとすれば、「なぜこのような階層が存在し、いかにしたらこれを再び矯正できるだろうか」と言うべきです。」<sup>(47)</sup>

「すべて容易に利用できるものではなくとも、あらゆる情報源からあらゆる類の材料を収集してきた。ことばで書きつけられているとすれば、表にできるであろうし、数値を提供する形にできることはどのようなことででもする。」「私はことがらの事実に関して世論を喚起しようとの関心がある。」<sup>(48)</sup>

伝統的な国家権力観によれば、強大で独占的な権力が中心にあり、その周りの人や地域に対して強大な力をふるい、正統な支配を独占していると考えられていた。しかしこれまで見てきたように、19世紀の終わりから20世紀の始めにかけて、「退歩」の問題が統治と知識との関係の中心にあったことは容易に見てとれるであろう。統治の対象たる人口について、中央における知識や情報を集積し分析することは、知識に基づく統治を可能にし、権力の中心から地理的にも離れている人やものごとに対する統治を拡大する形態であった。ロウズによれば、「離れての働きかけ (action at a distance)」というような統治形態、「これは中心にある国家が社会をとおしてその触手を伸ばすプロセスではなく、そこから離れている事件や人をプログラムする一形づくり、先導し、変換し、指導し、統制することのできる—中心へと国家を変換することをめざす、さまざまな支配のためのルールを発明することであった。」<sup>(49)</sup> 「リンク、ネットワーク、同盟、導管」がそれを可能としたのであり、その際、数値が重要であり続けた。一つは「出来事が標準化された形式で書き記されなければならないし、その書き記されたものは津々浦々から運ばれてこなければならないし、中心の場で集積されなければならない。そこでは書き記されたものは集められ、比較され、積み上げられ、計算される。書き記されたものと集積のそのような入り組んだりレーの発展を介して、権力を行使しようとする人と行使される人とのあいだに、権力のあらたな導管が存在するよ

うになる。」<sup>(50)</sup>

ハッキングが言うように、過去2世紀にわたるヨーロッパでは、生をめぐる統治において、その主導的役割を果たしたものは、イデオロギーといったものではなく、印刷された数値の「雨霰」であり、それを司る官僚制度が大きな役割を果たしてきた。国勢調査(センサス)、様々な調査によって書き記されたことばや数値が引き出され、集積されて、時空間を超えてセンターへと運ばれてきた。センターはそれらを分析することで、統治の対象を表象し、編み上げる中心の場として役割を担い、そのことで他の場所と自らを結びつけられるようになったのである。統計は情報のみを提供すると考えられるかもしれないが、近代国家における権力テクノロジーの一部であったのである。<sup>(51)</sup>

## 注

- (1) Inter-Departmental Committee on Physical Deterioration, *Report of the Inter-Departmental Committee on Physical Deterioration*. 1904. 視学官も務めたことのある枢密院事務局長のフィッツロイ (Almeric W. Fitzroy) を委員長として、教育局 (Board of Education) のもとで体育勅任視学官を務めるフォックス (Colonel G. M. Fox), 感化授産学校 (Reformatory and Industrial Schools) 勅任視学官のレグ (J. G. Legge), 教育委員会の主任補助書記官のリンセル (H. M. Lindsell), 海軍徴兵監督官のオンズロー (G. T. Onslow) 大佐, スコットランド教育局の補助書記官ストラザズ (John Struthers), 中央戸籍局のテイザム (J. F. W. Tatham), そして書記として法廷弁護士のパリー (Ernest H. Pooley) から構成されていた。
- (2) 陸軍医療長官のテイラーは、検査で 37.6% が不適格となった、と証言している (*Minutes of Evidence taken before the Inter-Departmental Committee on Physical Deterioration*, William Taylor, 9-.)。
- (3) *Report of the Inter-Departmental Committee on Physical Deterioration*, p. v.
- (4) *Ibid.*
- (5) その主なものを挙げておくと、附録 VI 表 I 志願を拒否された理由と前職／附録 VII 海軍で志願を拒否された理由と前職、郵便局での採用を拒否された年齢、身長、体重等／附録 IX 無断欠席者のための授産学校 (truants' industrial school) へと入学した少年の体重と身長／附録 IX 平均余命、死亡率、庶出、病因別死亡率／附録 XII 家族の環境分析／附録 XIII 社会環境による死亡率、余命、公営住宅、下宿などでの死亡率／附録 XIV イングランドとドイツの出生率

の比較／附録 XIX 身長測定による地域ごとの差異, ドリル, 移民, 精神薄弱 (feeble-minded), 学校での生徒の状態を示す写真／附録 XX シェフィールドで調査したくる病の子ども事例, 子どもを亡くした事例, 過密状態の事例／附録 XXII 労働者階級の少年の肉体的状態／附録 XXIII 少年の身長, 胸囲, 歯, 職業

- (6) *Report of the Inter-Departmental Committee*, p. 1.
- (7) *Ibid.*, pp. 92-93.
- (8) *Minutes of Evidence*, Arthur Shadwell, 12249.
- (9) イギリス科学進歩協会 (the British Association for the advancement of Science) の委員会が 1878 年から 1883 年までの 5 年間に身長, 体重やそのほかの身体的特徴について 53,000 人を調査した結果, パブリック・スクールの 11 歳から 12 歳の少年の平均身長は 54.98 インチであり, 他方, 授産学校 (industrial schools) の同年齢の少年の身長は 50.02 インチであった (*Report of the Inter-Departmental Committee*, p. 3.)。
- (10) *Ibid.*, p. 7.
- (11) *Ibid.*, p. 84.
- (12) 報告書への反応は様々であった。幼児・児童の福祉運動の歴史を著したデューワークによれば, ピアソン (Karl Pearson) やゴルトン (Francis Galton) らの優生学者が委員会が提供した証拠にも納得せずに, 彼ら自身の統計の正確さや主張に自信をもっており, 積極的そして消極的優生学のプログラムを主張し続けた。シドニー・ウェッブ (Sydney Webb) もまたフェビアン・リベラル帝国主義者のために語り, 社会主義者のねじれをともなった同様の考えを持っていた。ウェッブは各階級のうち自己統制的先見の明のあるメンバーが子どもを持つように奨励するために, 母親に財政的投資をすることを提言していた (Deborah Dwork, *War is Good for Babies & Other Young Children*, 1987, p. 19.)。ホークスは調査によって「事実」へと到達することの困難さを証言している。「慈善組織協会 (the Charity Organisation Society) のワーカーとして, そのような詳細にまで立ち入ってきたが, 真実へと到達するのに, 詳細な調査と洗練された調査なしでは, まったく馬鹿げたことであると思う。たいへん多くの場合に, 私たちはまったく欺かれていることを想起すべきである。とくにどの程度稼いでいるかに関しては, 真実はわからない。事実に到達しようとすれば, その人がどこで雇われているかを証明しなければならないが, 自分の賃金をぼかすために監督者にお金を支払っていることも知っている。」(*Minutes of Evidence*, Lewis A Hawkes, 13195.)
- (13) Quoted by Gillian Sutherland, *Ability, Merit and Measurement: Mental Testing and English Education, 1880-1940*, 1984, p. 114.
- (14) *Ibid.*
- (15) 1907 年に児童研究協会 (the Child Study Association) と統合され, 児童研究学会 (the Child Study Society) を形成するまで存続した。
- (16) Adrian Wooldrige, *Measuring the Mind; Education and Psychology in England, c. 1860-c. 1990.*, pp. 30-.
- (17) *Ibid.*, p. 23.
- (18) *Report of the Inter-Departmental Committee*, p. 59.
- (19) グレイは人口測定機関の評議員そして会計責任者を務め, 人口の肉体調査の

ためのイギリス協会人体測定委員会の幹事であったが、彼もまた、民族が頽廃しているかどうかは、まず第一に事実を確定することから始めるべきで、頽廃を改善しようとしてこれまでなされてきた施策は、事実を確かめることをしておらず、失敗を招いていると述べ、頽廃しているか否かという事実を確かめるためには、人体測定調査を継続することが必須としている。より具体的に彼が提案しているのはカニングムと同様の人口測定学調査である。その提案されている調査計画では、連合王国は一地区当たり10万人の住人で構成される400地区に分けられる。就学年齢に達していない5,000人の幼児、7万人の大人、5歳から18歳の25,000人の子ども・青年がいることになる。サンプル調査には2,000人が必要であるが、学校には13の年齢グループがあり、サンプルの平均規模は2,000人に達しないので、年齢グループごとに十分なサンプルを得るためには、各地区の全員を測定する必要がある。就学年齢に達しない幼児は統計を得るのが難しいから、この測定では考慮しない。親にこの測定をやらせることは可能である。大人の場合は、サンプル2,000人、男女各1,000人を測定するだけで十分である。10年ごとに25,000人の児童と、2,000人の大人を測定することが必要である。計画では10年間で400地区の測定ができるので、1千万人の児童と80万人の大人を測定することになる。毎年測定するのは児童100万人と大人8万人となる。専門家は1時間に30~40人、一日に180人の児童の頭囲、胸囲、身長、体重を測定する。教師が身長と体重を記録する。一日で180人の児童が測定され、一年で250日を測定可能日とすると、45,000名が測定されることになる。100万人の児童を測定するとすると、22人の調査者が必要となる計算である。大人の場合は、一日50人は測定できないので、250日を測定にあてるとすると、毎年12,500人となる。7人の調査者が必要で、児童の調査者と合わせると約30人の調査者が必要となることになる。教師や医者あるいは工場査察官などを調査に当たらせることは、経費を上昇させるので勧められないとしている。(Minutes of Evidence, Gray, 3247-)

- (20) John Eldon Gorst, *The Children of the Nation*, 1906, pp. 9-10. ゴーストは次のように子どもの検査をすべきとしている。教師は子どもの検査をすることから一日を始めるべきで、クラスの教師は、一列にクラスの生徒を並べせ、陸軍や海軍の士官のように子どものまわりを歩き回る。教師は各々の子どもの肉体状態について記録をつけるべきで、それには子どもの家庭の特徴、家族の人数、部屋数などが記録される。両項目をかけ合わせることで、子どもが住んでいる家屋の種類と学校でのその一般的状態との関係がわかることになる。子どもの栄養状態についても毎日記録をつけるべきであり、子どもが朝食抜きで登校した場合も記録される。子どもの栄養と健康状態についても記録される。毎日子どもやその衣服の清潔さについて記録がとられ、教師が帳面を手にしてクラスを見回り記録する。30人から40人の子どもを検査し記録するにはそれほど時間はかからないし、この結果、それは子どもたちの「成長記録」となるし、教師はたいへんな関心をもつであろうし、親に対しても関心を喚起するように働くことになる。この他にも、看護婦による眼、鼻、喉の検査がなされる。そして最後に医者による検査がなされる。言わずもがなであるが、この調査によって、子どもの病気を治療し、子どもが成長して強い男性や女性となることは「国家の利害」にかなったことであり、幼いときに治療しないのは、もっとも生命の浪費となる。(Minutes of Evidence, John Gorst, 11877-)

- (21) *Minutes of Evidence*, Eichholz, 604. 実際に人体測定学調査を担当する人物として教師がふさわしいかどうかは意見が分かれている (*Minutes of Evidence*, Robert Jones, 10846.)
- (22) *Report of the Inter-Departmental Committee*, p. 91.
- (23) *Life and labour of the people of London: 1892-1903*.
- (24) B. Seebohm Rowntree, *A Study of Town Life*, 1901 (長沼弘毅訳『貧乏研究』昭和34年)はヨークの家々を一軒一軒訪ね調査したものである。「わたくしが、本書に収められた調査を行なった目的は、地方的な町 (provincial town) の賃金所得者階級の生活を支配している状態ことに貧乏の問題について、探求を試みることにあった。」「住居の状態、その職業、その稼ぎ高、それに加えて各家庭の子供の人数および年齢について調査を行なった。この特殊調査は、1899年の秋に行なわれたものであるが、その包摂範囲は、388の街路に住居する11,560の家庭におよび、人口は、46,754人に達している。」(同上訳書, 16頁)
- (25) David Armstrong, *Political Anatomy of the Body: Medical knowledge in Britain in the twentieth century*, 1983, p. 42.
- (26) Charles Booth, *op. cit.*, *First Series: Poverty* 3, p. 195.
- (27) *Ibid.*, *East London*, pp. 5-6, 25-26.
- (28) リビはウォルワスのヴィクトリー・プレースの委員会学校の校長、ロンドン学校給食協会の実行委員会のメンバー、無償学校給食基金の名誉事務長である。*Minutes of Evidence*, 7834-, *Report of the Inter-Departmental Committee*, p. 68.
- (29) マクナマラはキャンパーウェル選出下院議員、ロンドン学校委員会のメンバーであり、教師としての経験もある。*Minutes of Evidence*, 12421.
- (30) David Rubinstein, *School Attendance in London, 1870-1904*, 1969, p. 52.
- (31) Gillian Sutherland, *op. cit.*, pp. 10-11.
- (32) Margaret Alden, *Child Life and Labour*, 1908 (second ed.), pp. 87-89.
- (33) *Minutes of Evidence*, Kerr, 762.
- (34) *Ibid.*, 764.
- (35) Adrian Wooldridge, *op. cit.*, pp. 53-54.
- (36) Frederick W Mott, The Relation of Herdity and Insanity to Destitution, in *Report of the Proceedings of the National Conference on the Prevention of Destitution*, 1911.
- (37) *Minutes of Evidence*, James Niven, 6231-.
- (38) *Ibid.*, 518-.
- (39) *Ibid.*, 2051-.
- (40) John Tagg, *The Burden of Representation*, 1988, p. 5.
- (41) *Report of the Inter-Departmental Committee*, p. 9, *Minutes of Evidence*, D. J. Cunningham, 2245, カニングガム自身の証言によれば、10年間にわたって、ダブリンのトリニティカレッジの人体測定学実験室では、人々を規則正しく測ることがしごとの一部としてなされてきたし、得られた結果について年次報告書が発行されてきた (*Minutes of Evidence*, D. J. Cunningham, 2205.)。
- (42) *Report of the Inter-Departmental Committee*, p. 85.
- (43) *Ibid.*, p. 7.
- (44) *Ibid.*, p. 86. 人体測定学調査の結果、地域によって差異が明らかになった場合

は、中央政府が地方当局に対して圧力をかけて、その原因調査をさせることに賛意が呈されている (*Minutes of Evidence*, Arthur Shadwell, 12326.) マンチェスターの医師アシュビー (Henry Ashby) は身長、体重、胸囲の統計調査を実施し、それらを時系列に沿って、あるいは産業地区ごとと比較解析することによって、特に数値が劣悪の場合には、人々の意識を喚起するとともに、それを改善するために人々が努力するように駆りたてることになるとしている (*Minutes of Evidence*, 8813-.)。

- (45) *Report of the Inter-Departmental Committee*, p. 13. 『マンチェスターガーディアン』紙のロンドン編集者であるアトキンスは、肉体の「退歩」が実際に見られるか否かをつまびらかにするために、統計を収集する中央部局を創設することに賛意を呈するとともに、内務局、教育局、地方管理委員会の協力のもと、収集された統計は国が進歩しているのかあるいは停滞しているのかを明らかにするとしている (*Minutes of Evidence*, J. B. Atkins, 3061)。中央政府統計局 (Bureau of statistics) を組織し、統計を集積し分析することで、統治へと道を拓くと多くの者が主張している (*Minutes of Evidence*, W. Leslie Mackenzie, 6915, Lyttleton, 5851, Shirley Murphy, 10437.)。
- (46) 陸将モリスの証言 (*Minutes of Evidence*, 406-.)
- (47) 聖バーソロミュー病院の医師プラントンの証言 (*Minutes of Evidence*, 2438-.)
- (48) サルフォード教育委員会のメンバーで、人体測定下部委員会の長リースの証言 (*Minutes of Evidence*, 4461-.)
- (49) Nikolas Rose, 'Governing, "advanced" liberal democracies', in Andrew Barry, Thomas Osborne, Nikolas Rose (eds.), *Foucault and Political Reason*, 1996, p. 40.
- (50) Nikolas Rose, *Powers of Freedom*, 1999, p. 211.
- (51) Ian Hacking, 'How should we do the history of statistics?', in Graham Burchell, Colin Gordon and Peter Miller (ed.), *The Foucault Effect*, 1991. 「多くの著者が、「世界観」あるいは「経済」のレベルでの転換によるものと以前は考えられていた近代社会の多くの特徴が、刻印 (inscription) のテクニックでの変化にむすびついている、と私は主張した。アルファベット、書くことそして印刷機の発明は社会の認識的あるいは概念的 세계에서基本的変化をうみだした。」 (Nikolas Rose, 'Calculable minds and manageable individuals', *History of the Human Sciences*, Vol. 1, No. 2, p. 195.)